

少年問題を考える

社会科教育講座・川岡勉

1. 授業の概要

この授業は、現在の若者・少年問題の現状から出発し、学校とは異なる場で子どもの問題と向き合っている方々の活動から学び、問題解決に向けた意欲・態度や実践的な指導力を育成することを目的としている。そのために、愛媛県内外の少年問題に関わる専門家や経験者等の講話を聞いて知識・理解を深めるとともに、学生自ら問題解決に向けた対策教育プログラムを構築させる時間を設けた。

到達目標として掲げたのは、(1)少年問題・犯罪の実情について深い知識・理解がある。(2)講師の方々の実践を通して実践的な問題解決を志向する態度がある。(3)少年問題・少年犯罪の解決に向かう実践的な自己教育課題を見いだすことができる、の3項目である。

関連するDPは、教育をめぐるさまざまな現代的課題について論じ、適切な対応を考えることができる(思考・判断)、自己の学習課題を明確にし、理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる(関心・意欲)である。

受講者は、学校教育教員養成課程の学生が73名、特別支援教育教員養成課程17名、総合人間形成課程2名、スポーツ健康科学課程1名、芸術文化課程1名の合計94名であった。学年は3回生が91名、4回生が3名である。授業の構成は、次の通り。

- ① 生徒指導の課題
- ② オリエンテーション
- ③ 学校における不審者対策
- ④ 少年問題・少年犯罪の現状
- ⑤ 薬物乱用防止教室
- ⑥ インターネット犯罪とその対策
- ⑦ 犯罪被害の支援について
- ⑧ 子どもたちの問題と向き合っ
- ⑨ グループワークー資料作成(1)
- ⑩ キッズ・タクティール
(スウェーデンの犯罪被害対策)
- ⑪ グループワークー資料作成(2)
- ⑫ グループワーク発表(1)
- ⑬ グループワーク発表(2)
- ⑭ グループワーク発表(3)

⑮ グループワーク発表(4)、まとめ

授業の進め方としては、外部講師の講話と学生たちのグループワークを組み合わせた。外部講師として招いたのは、③～⑥は愛媛県警の担当者、⑦は犯罪被害者の遺族、⑧は児童自立支援施設えひめ学園の職員、⑩はスウェーデン人の講師である。

グループワークでは、「子どもたちの〈問題〉と向き合う教師へ」というテーマで、講話の内容をふまえたプログラム開発・授業案作成に取り組みさせた。各グループが取り上げたのは、情報化社会を生きる、食育について、自己肯定感を高めるために、エンカウンターを活用した授業作り、特別支援学級における防災プログラム、食育、特別支援学校に在籍する知的障害児への性教育指導、いじめ対策プログラム、防災教育プログラム開発、薬物乱用防止プログラム、脱「こ」食宣言、ネットいじめ、ネットいじめ対策プログラム、薬物乱用防止、自転車の交通指導について、という15のトピックであった。

この授業を担当したのは、教育コーディネーターの川岡勉・吉村直道・山本久雄であり、前年度まで積み上げてきたやり方を基本的に踏襲する形で実施した。

毎回の授業後に提出させたミニレポートと、グループワークの発表をもとに成績評価を行った。

2. アンケート結果

最後の授業時に授業評価アンケートをとり、74名の学生から回答を得た。

まず、この授業は教員にふさわしい資質を育てる上で役にたつと思うかを問うたところ、「強くそう思う」(29.7%)、「まあそう思う」(67.6%)、「あまりそう思わない」(2.7%)、「全くそう思わない」(0%)という結果であった。判断した理由を尋ねると、子どもをとりまく社会環境について外部講師による貴重な話が聞けた、他の授業では扱われない新鮮な内容で問題意識を持って取り組むことができた、グループワークによるプログラム開発に主体的に参加する機会が得られた、実際の授業作

りにも活用できる実践的な内容で自らの行動を見直す機会にもなった、などの声が寄せられた。

次に、③～⑧・⑩とグループワークについて次年度も設けるべきか尋ねたところ、⑤を除いて「強くそう思う」と回答した受講生が最も多かった。前年度は「強くそう思う」が多いのは⑧⑥だけで残りは「まあそう思う」という回答が最も多かったことを考えると、格段に評価が高まっている。とくに⑧（児童自立支援施設の取り組みが）については8割近くの受講生が「強くそう思う」と回答し（前年度は約6割）、強い共感を得たことが分かる。⑦（犯罪被害者の遺族）の話も学生の心に響くものであり、③（不審者対策）も印象深かったようである。⑥（インターネット犯罪）・④（少年非行の現状）に対する関心が高いのは、前年度とほぼ同じ傾向と言える。「強くそう思う」の比率が低かったのは⑩⑤であるが、それでも4割以上となっており、これも前年度に比べるとかなり評価が高い。逆に「あまりそう思わない」「全くそう思わない」は、⑩を除いて5%以下である。⑩（キッズ・タクトイール）については、「あまりそう思わない」が2割となっている。他国のいじめ対策を知れたのは貴重で面白かったという声が聞かれた反面、日本に導入される可能性は低いと思うという意見がみられた。

グループワークも概ね好評で、次年度も設けることに、49%が「強くそう思う」、46%が「まあそう思う」と回答している。講話を聞いた後に自分たちでプログラム開発・授業案づくりに取り組んだことで考えが深まった、授業力や発表する力の向上につながる、他グループの発表を聞いて多角的に問題を捉えることができたといった感想が聞かれた。

この授業を受講してよかったかを問うたところ、「強くそう思う」38.2%（前年度13.2%）、「まあそう思う」58.8%（前年度79.4%）、「あまりそう思わない」1.5%（前年度7.4%）、「全くそう思わない」1.5%（前年度0%）という結果であった。自身が意欲的・積極的に取り組んだかを問うと、「強くそう思う」29.4%（前年度13.2%）、「まあそう思う」64.7%（前年度76.5%）、「あまりそう思わない」4.4%（前年度10.3%）、「全くそう思わない」1.5%（前年度0%）という回答結果であった。シラバスの掲げた到達目標を達成できたと思うかを尋ねる

と、「強くそう思う」11.8%（前年度0%）、「まあそう思う」85.3%（前年度89.4%）、「あまりそう思わない」1.5%（前年度10.6%）、「全くそう思わない」1.5%（前年度0%）という結果が得られた。

上述項目の判断理由を書かせたところ、少年問題に対する考えが深まり自己の課題もよく見えるようになった、実際の教育現場において役に立つ実践的な知識や情報が多数あり貴重な体験的な活動もできた、毎回の授業で提示された問題について自分が教師だったらどうすべきかという視点で考えることができた、プログラムの作成・発表に意欲的に取り組んだなどの記述がみられた。

この授業の問題点、改善すべき点を問うたところ、ミニレポートの提出期限・方式を再検討して欲しい、グループワークの準備期間が短い、発表グループをしぼるなどして発表・討論時間に余裕をもたせた方が深まりのある授業になる、発表の手順や方式をきちんと決めて学生に事前の説明を詳しくして欲しい、などの意見や注文が寄せられた。

3. 総括

全体として授業の目的にふさわしい構成であり、講話だけでは受け身に陥りがちとなるが、学生自身によるプログラム開発を組み合わせることで主体的に考えを深める機会が持てたと思われる。圧倒的に多くの学生が教員にふさわしい資質を育てる上で役に立つ、受講してよかったと回答していることは、この授業の教育的意義を示すものと言えよう。各回の授業内容をはじめ、全体を通じた学生の評価も前年度よりかなり向上しており、ほとんどの学生が到達目標の達成状況に「強くそう思う」「まあそう思う」と回答しているのも、授業の成果を表している。

グループワークについては、主体的に関わることができてよかったとする声がある一方、発表の方式や時間配分などに関しては、もう少し工夫が必要と思われる。グループワーク報告書は、前年度のものに比べると充実した内容になったが、発表資料との関連づけを十分検討していなかったため、学生への指示が混乱する場面があったのは反省材料である。

次年度以降、とくにグループワークと発表会の充実を中心に一層の授業改善を図り、受講生の学習意欲をさらに高めていきたい。